

---

# まよチキ！！

近衛スバルは俺の嫁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まよチキ！！

### 【Nコード】

N3968V

### 【作者名】

近衛スバルは俺の嫁

### 【あらすじ】

主が坂町近次郎となり、まよチキ！の世界を楽しみます。駄作、駄文率が高いですが、それでもいいという方はよろしく願います。  
メインヒロインは近衛スバルです。

只今、怪我&amp;mp;病気が併発中です。  
続きを待っている皆様しばらくお待ちください。

最近のヒロインは男装しているパターンが多い件について(前書き)

新連載第3段。

はいはいヾ(´・`・\*)ノ皆様こんにちは。

友人から借りて読んだら異常なまでにはまってしまったので書きたいと思います。

たぶん、だぶんです。

それでもおkという方はよろしくお願い致します

m(\_\_\_\_)mmm(\_\_\_\_)mmm(\_\_\_\_)m

また同時連載

『I S A n o t h e r p e r s o n a l l i f e 』

『俺だつて友達が少ない』

もよろしくお願いします。

うp待ちの皆様すみません。

ですが主は嫁達とウハウハしたいので頑張ります!!!!!!!!!!!!!!

最近のヒロインは男装しているパターンが多い件について

とりあえず、だ。

俺の名前は坂町近次郎。

っと、そんなことをしている場合じゃない。

待て、待ってくれ。

何故俺は今、男に追われるという状況に陥っているんだ？

とりあえず状況整理をしよう。

ことの始まりは今日、まだ始業式から1週間しかたっていないにも関わらず起きた。

トイレにて用をたすべくドアを開けた時だ。

なんと、この”私立浪嵐学園”の人気者が入っていたのだ。

近衛スバル。

”私立浪嵐学園”での人気者であり、文武両道。

容姿端麗。才色兼備。眉目秀麗。偉才秀才。

もし彼が女だったなら、この学園の男はノックアウト確定である。

そう、そのくらいの美少年であり、女子はそんな彼を「スバル様」と呼ぶほどである。

ちなみに、彼は執事という絶滅危惧種の仕事をしているのだ。

しかし、問題はそこではない。

通常なら「すまん、てつきり入ってないと思った」と言えば、相手に「ノックくらいしろよ」と思われるくらいで済む。

だが今回は異例だ。

何故かって？

それは

皆の人気者の穿いているパンツが女性用だったから である。

「……………近衛スバル？」

そう口に出しつつドアを閉めた。

そしてトイレから逃げ帰るようにして飛び出した時に、追って来た近衛スバルから逃げて今に至る訳だ。

さて逃げつつ考えた。

なあんだ、簡単なことじゃないか。

近衛スバル 彼は”変態”だったのだ。

「なんてこつたい、あのスバル様が変態だったなんて……………」

「見たな？」

男にしては少し高めのアルトボイス。

そう、もう会話ができるくらいに距離が近づいているのだ。

「ジロー……坂町近次郎。うん、確かそんな名前だったはずだ」

殺される。

確実に殺られる。

「…っ！！」

『早い』もとい『速い』。

どうしてかはわからないが、そんな漠然とした不安が頭を過った。

「黙ってるつもりなら、もう一回訊くぞ」

そして再びの尋問。

「おまえ　ボクのパンツ見たる？」

怖い。死ぬる。

とりあえず、逃げの一手。

「サア？ナンノコトダー？シラナイナー」

「ふうん、あんなにはつきり見たのに、見てないって言うのか」

相変わらずの冷静な口調。

しょうがねえな。

文章がおかしくなっても白を切り続けてやる。

「いい加減楽になれ。見たんだろう？しっかり目に焼き付けたんだろう？ボクのパンツが見たくてあのドアを開けたんだろう？」

「そんなわけあるか！誰が男子のパンツ見たさに、トイレ覗くんだよ。それに俺はあんな子供みたいなのは、趣味じゃねーよ！」

「………………。悪かったな、キャラ物の下着で。それはそうと、どうしてボクのパンツの柄を知ってるんだ？」

「……………」

あ……。誘導尋問か……。

「おち、お、お、おち、落ち着け！お前がやけに可愛らしいパンツ穿いているから、ビックリして思わず凝視しちまったただけだろうがっ！」

「黙れ変態。お前がどんな人間かよくわかったから」

ジトーっとこちらを睨む近衛。

くう、真性の性犯罪者でも蔑むような冷たい眼だ。

ちくしょう、俺が何したっていうんだ…！

「くそっ！さつきから好き勝手言いやがって。お前だって、校内で女性用下着を着るくらいの変態じゃ…」

と、不意に殴られた。

背中に打ち込まれた一撃は俺にとってみれば不意打ちなるものだ。

突然の背後からの衝撃に背は反り、息が強制的に吐き出された。

「……驚いた。今のは最低でも気絶、下手をすれば吐血だってあり得る一撃だったのに、よく耐えたな」

「……………」

おい、こら。

いきなり背後からそんなもんを打ち込むじゃねえよ。

そう言えば、近衛は執事として主を守るために護身術を習っているという噂を聞いたことがある。

確かに、今のは半端のない威力だったな。

だが、おあいにくさま。

この程度の打撃なら、家庭の事情で五歳の頃から喰らってる。

自分で言うのもなんだが、俺はそれなりに打たれ強い身体をしているのだ。

「仕方ない。では、こっちも本気を出そう」

「はい？」

「ちなみに、今は全力の半分程度のパワーだからな」

「……………。お前はどこのサイヤ人だ。それになんで俺が殴られなきゃならないんだよ」

「ふん。そんなもの決まっているだろう。お前はボクの秘密を知ってしまった。知られたからには、消えてもらう」

「なっ」

なんだよ、それは。

死ぬの？

パンツ見ただけで？

「怖がることはない。消すのは命じゃなくて記憶の方だ。ボクの家には、代々伝わる記憶抹消術がある」

「な、なんだよ……………ビビらせやがって。けどそれってどんな方法なんだ？」

「殴る」

「は？」

「聞こえなかったか？殴るんだ。これからボクはおまえの記憶が飛ぶまで殴り続ける。それが執事の記憶抹消術だ」

「死ぬわ！！それこそ記憶より肉体が先に滅ぶ！！ていうか執事関係ねえだろ！！」

「安心しろ。すぐ終わる。目覚めたら病院のベッドの上だ。そこでおまえは『ここはどこ？私は誰？』という典型的な文章を呟くことになる。ほら、何もかも丸く収まっただろっ？」

「収まってねえ！廃人じゃん！俺が廃人になってんじゃん！生まれてから十六年間の大切な思い出まで全ぶっばかよ！」

「心配するな。月二回は見舞いに行つてやる。手ぶらでな」

「何か持つてこいよ！せめてそれくらいしてもバチは当たらないだろ」

「むう、仕方ないな。じゃあエツチな本だ。何がいい？熟女か？」

「おまえは俺の趣味を激しく誤解している……！！」

「……まさか……??コンだったのか？」

「んなわけあるか！」

俺の中の近衛スバル像が崩壊のお知らせ。

多分今の近衛には”秘密を守る”って言っても通じない。かと言ってこのままリンチにあつのもごめんだ。

「……くそ、しゃあねえな」

「なんだ抵抗する気か？」

「ああ、あいにく痛いのは嫌いなんだ。だからやるだけやってみることにした」

「いい覚悟だ。ボクはそういうのは嫌いじゃないぞ、ロリコン」

「……なあ。頼むから、ロリコンはやめてくれないか？」

と。

近衛は握った拳を構えながらバックステップで俺と距離を取った。

かかって来い。

そんな挑発的な感じだと思う。

殺る気満々の執事くんに応えるように俺は静かに足を踏み出す。

そう　後ろに、ゆっくりと足を踏み出した。

「なっ」

驚愕に息を飲む音が聴こえた。

だが遅すぎる。

すでに俺の身体はくるりと180°回転して走り始めていた。

逃走。

逃走である。

速さには自信があるもんで。

「お、おまえ！逃げる気か！」

背後から再び近衛の声。さすがに焦っているらしい。

「逃がすかつ！」

やっぱり追いかけてきやがった。

ここは二階だ。

一階に逃げるといふ手段もあるが階段はマズい。

きっと上から飛び蹴りを喰らう。

それなら……！

階段をスルーしてその先にある教室に飛び込む。

鼻につく薬品の臭い。

そう、理科室だ。

扉を閉めて、鍵を施錠する。

よし、あとは人体模型ジエニーで塞げば…

どきやつ。

人体模型で扉を固定しようとした瞬間、理科室に響く破碎音。

後ろを向くとそこには近衛の姿。

どうやらドアを蹴破って入ったらしい。

そして弾け飛んだドアをかわす。

「追い詰めたぞ」

くそう、こうなったらやるしかない。

「やっとやる気になったみたいだな」

「今度こそ仕留めてやるぞ。ボクの『執事ナックル』でな」

「……………」

うわー、ダセえ。

なんだよ、執事ナツクルって。

そのまんまじゃねーか。

「どうでもいいけど、お前ってネーミングセンス皆無だな」

「なっ……何を言う！かつこいいだろ！？ほら、執事ナツクル！」

「いや、カツコ悪いよ。執事ナツクル」

率直に感想を述べると、近衛は顔を赤くしてううと唸った。

……もしかして、恥ずかしがっているのか？

「くう……こんな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ。もう許さないぞ。おまえには、ボクの必殺技を喰らわせてやる」

「必殺技？」

「そう、名づけて『エンド・オブ・アース』」

「スケールでええええつー！！」

地球が滅んでんじゃん。

「やっぱり、そのネーミングは残念だな」

「う、うるさいな！ボクのネーミングにケチをつけるな！」

「…………。ごめん、俺が悪かったよ。おまえだって、一生懸命考えたんだよな…………」

「なっ…………なんだその悟りきった顔は！そんな可哀想なものを見るような目でこっちを見るなよ！」

くそう……………かつこいいと思ったのに……………一週間もかけて考えたのに……………と近衛は小さな子供みたいに口唇を尖らせて拗ねた。

…………。

やばい。

なんかコイツ……………すげえ可愛いぞ。

なんかグツときて　おい、馬鹿止めろ。

うわぁー！

コイツ　入ったらガチホモとして分類されちまう。

「  
」

緊張が理科室を支配する。

その中で　先手を打とうと、俺が間合いを詰めようとして、

気付いた。

近衛の横の棚。

たぶんさっきの争いでバランスが崩れたのだろう。

その上にある大きな硝子製のビーカーが、今にも落ちそうになっていた。

近衛は気付いていないっぽい。

角度的に見えないのだろう。

徐々に傾き始めたビーカーは、糸が切れたように重力の虜となって自由落下して、

「避ける！」

反射的に身体が動いた。

不意に近衛は口をあけてぽかんとしている。

くそ、まだ気付いていないのかよ！

当たる。

このままじゃ、あいつの頭に硝子ビーカーが。

「くっ！」

頼む。間に合ってくれ。

そう願いながら、俺は力いっぱい近衛を押し倒した。

衝撃。

そして硝子の割れる甲高い音色。

振り返ると、俺たちのすぐ後ろにバラバラに砕けたビーカーの破片が散らばっていた。

……危ねえ、間一髪じゃん。

「うっ……」

下から苦しげな声。

見ると俺に押し倒された近衛がうめいてた。

どろろとして…。

瞬間フリーズ。

人形のように華奢な身体。整った輪郭。水晶玉の瞳。

……やべえ、なにこの可愛い生き物。

それにいい匂い。

そして柔らかい。

わずかに弾力のある感触が俺の掌に吸い付くように。

「……………あれ？」

ちよつと待てよ。

いくらなんでもこの感触はありえないか？

ふにゅふにゅと近衛の左胸に乗った指を動かしてみる。

……………。

おかしい。

おかしいおかしいおかしい。

どうしてコイツ　男のくせに胸があるんだ。

「きゃあああああっ！」

すぐさまアッパーが飛んできた。

吹き飛ばされた俺はさらに新しい自分の身体の変化に気付いた。

血が…鼻血が出ている。

「おまえ…まさか女？」

「おまえ、人の胸まで触っておいて、鼻血まで流して…」

そう言いながら、近衛は消火器を持ち出してきた。

「えっ、ちよつとまつて」

「問答無用!!」

鼻血で薄れ行く意識の中、消火器に殴られたような、殴られてないようなまま、俺の意識はフェードアウトしていった。

**最近のヒロインは男装しているパターンが多い件について（後書き）**

では、今回はこの辺で、筆を置かせて頂きます。

面倒くさいことになった(前書き)

はいはい(グ)、、\*( )主です。遅くなりました。  
手が痛いので、もう少し執筆をお休みします。

ただし少しずつは書いているので出来たらアップしていきたいです。

面倒くさいことになった

「ぎゃあああああっ!」

最悪だ。

まさかスバル様のパンツを見ただけで死にかけるといふカオスな夢を見てしまった。

「……起きるか」

ため息を吐いて呟いた。

枕元にあった眼鏡をかけて視界をはっきりさせる。

とりあえず今は何時だろう？

さすがに新学期早々遅刻は印象が悪いしなあ。

「……って、あれ？」

回復した視界。

しかし目の前に広がる光景は俺の家ではない。

「……保健室？」

そう保健室なのだ。

とりあえず、起きよう。

寝起きの脳ミソでなんとかそう判断してから、被っていた布団を剥ぎ取るうと右手を動かした。

が。

突然『ジャラ』という音がし、その後右手が動かなくなる。

「……………ジャラ？」

耳障りな金属音。

動かない右手。

不審に思い確認してみると、そこには”わか”がある。

手錠。

ベッドの柱と恋人同士のように繋がれた手錠がそこにはあった。

「……………」

何ぞ、これ？

ああっ！夢か！

まあとりあえず右手をガチャガチャと動かす。

だが、動かない。

犬はいいよな。

繋がれてさえいればエサは貰えるんだ。

明らかに今の俺よりはマシである。

「  
っ！」

不意に鈍い痛みが走った。

頭痛。それもひどい頭痛だ。

風邪でもひいたか？

いや、おかしいな…頭がズキズキするぞ。

まるで何か硬い物で頭をかち割られたみたいな……。

そんな頭を気休め程度で左手で押さえる。

「……ん？」

待てよ。

左手動いてねーか？

確かめるように左手を動かしてみる。

おお、コイツ動くぞ。

繋がれているのは右手だけか。

自由に動く左手。

少しでも状況を把握しようと、左手で布団をひっぺがしてみた。

「……………っ!？」

その瞬間　本日二度目の絶叫をしかけた。

女の子。

女の子だった。

艶やかな黒髪をツーサイドアップにした少女が、俺に寄り添うようにしてすやすやと眠っていたのだ。

(ぎゃあああああっ！)

びっくりして、声にならない叫びがこみあげる。

それもそうだ。

今俺の隣にいるかたをどなたと心得る？

浪風学園一のパーフェクトな優等生、涼月奏様にあらせられるぞ。

まあ、早い話…近衛を雇っているお嬢様である。

そして今、その涼月が俺の隣で眠っているのである。

ちなみにまだ話したことはない。

当然だ。

学園のアイドル的ポジションの涼月と一般高校生ではエベレスト山脈から平地くらいの違いがあり、アリアナ海溝より深い溝があるのだ。

でも、何故。

どうしてそんなヤツが俺の横で眠っているんだ。

「う、ん……………」

小さな寝息。

……………マズい。

背中から脂汗が、そして鼻からは鼻血が噴き出した。

女。

女が居る。

息がふきかかりそうな距離である。

こんなに近くに女に来られたら……………。

「……………ん。……………あら、起きたの？坂町くん」

凜とした響き。

目が覚めたのか、ぱちりと瞼を開けた涼月は俺の顔を見るなりベツドから降りた。

「大丈夫かしら。その手錠、痛くない？サイズのには小さくないと思っただけど」

「……………は？」

……………。

ちよつと待て。

この女、何言ってるの？

「安心して、坂町くん」

話に追いつけない俺を無視しながら涼月は続けた。

「手術は、無事成功したわ」

「……………え？」

「これであなたも、晴れて我々ショッカーの一員となったのよ」

「な、なにいいいいっ！？」

「さあ、貴方はもう普通の人間ではないわ。試しに『変身っ！』っ

て叫んでみて。それで貴方の秘められた力を解放することができるわ」

「ナ、ナンダッテ？よし、ちょっと待ってる『変身っ！』」

.....。

「wwwwww」

変身できるわけがなかった。

ぶっちゃけ、小学生でも理解出来る話なのだが…。  
俺の起きたての脳ミソのレベルは小学生以下なのか…。

ショックだ…。

「それではそろそろ本題にはいるわ」

「お、おう」

「貴方を拘束したのは…私の執事につ（ry）」

「やっぱりその話か…」

「では、話すわ…涼月家にはスバルの家系の執事がいるわ。もともと執事は男性の仕事なの。でもスバルの家庭ではスバルしか生まれなかったの。スバルは男としてこの学校に通っているの」

と…と…とらしい。

「長い説明お疲れ。ん？もしかして口止めか何かされんのか？」

「しないわ」

”ホッ…”と、ため息をついた。

「ただ取引はするわ」

「マジですか…。で、どんなご用件で？」

「スバルのことを口外しない代わりに、貴方の体質を治療してあげるわ」

「俺の体質を知っているのか…？」

「ええ…坂町近次郎君？」

「ぐっ…何故フルネームで…？」

「サカマ、チキン、ジロー君？」

野郎、人のトラウマを掘り返しやがった。

俺はこの体質のことだからかわれた事があり、それ以来トラウマと  
なっているのだ。

何か…話を反らさなければ…。

”取引”という名目で怪しい制約を取り付けられそうに怖い…。

「と、ところで近衛は何処に行ったんだ？」

「ああ…スバル？スバルなら此処よ？」

涼月は俺の隣のベッドのカーテンを勢いよく開いた。

するとそこには、鎖と南京錠によって縛られた近衛の姿があった。

「おい、鎖外してやれよ。いくら男装していても近衛は女なんだぞ？」

「あら、外していいのかしら？」

「お嬢様に欲情する奴は殺す、殺す、殺す、殺す、コロス、コロス、コロス」

「やっぱり、外さんくてよかですばい！」

余りのテンパリ具合によく知らない方言でたし。

「で取引を受け入れるの？」

くそっ！

腹を決めるしかない！！

俺は半ばヤケクソ気味に

「わかつたよ！！」

と叫んだ。

面倒くさいことになった(後書き)

眠い…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3968v/>

---

まよチキ！！

2011年10月10日02時58分発行